

後には、モルガーニの病気の座という考え方が在ったに違ひなからうし、病態生理学の創始者と目される同時代のブルツセイの影響も感じられる。実際に使用された形跡はなく、その後の内視鏡の発展になんの影響を残さなかったが、脈をとる以外は患者の体に触れることすら躊躇していた当時の医学界を思えばきわめて先駆的であった。

黄表紙の始まりとされる恋川春町の『金々先生榮華の夢』が出たのは、『解体新書』が出版された翌年である。それから三十年間に二千種以上の黄表紙が出版された。日本人にとってお腹は特別に重要な意味を持っているとされ、日本の漢方医学では腹診が独特の発達をした。北尾重政が描いた遠眼鏡で腹の中を覗いている絵を、お腹を重視した日本人の病氣観の現われと言っては言い過ぎであらうか。

およそ二百年が経過して内視鏡は目覚ましく進歩した。子宮を摘出できるところまでには達していないが、ポッチニールが空想した内視鏡下の手術は今や真つ盛りである。胃カメラに始まり世界をリードしている日本の内視鏡学は、竹斎老が夢見たような山吹色の宝を齎らしている。

(平成八年五月例会)

森鷗外作「なかじきり」解釈の試み

—「医」に関する言及をめぐって

志田 信男

森鷗外は官を辞した一九一七(大正六)年九月に「期論」第一卷第一五号に「なかじきり」という短い文章を発表した。鷗外自身の生涯の「なかじきり」として書かれたという意味で重要なエッセイである。鷗外研究家石川淳は「鷗外随筆中もつとも精彩ある文字である」と述べ、この小文を高く評価している。しかしこの文章には鷗外の「本職」の「軍医」としての言及はごく少ないばかりでなく、鷗外風にいえば奇妙なネガティブを示している。これを鷗外の「謙遜」とする説もあるが、山崎正和なども「奇妙」で「考えられない」ことである、としている。様々の角度から考えておおよそ「謙遜」とは遠い人物だったと思われる鷗外の文章としては、不思議ではないか、というのが小稿の出発点である。

「なかじきり」において鷗外は「医」に関して二回言及している。有名な「わたくしは医を学んで仕えた。しかし會て医として社会の問題に上ったことはない。」がその一つでここでは「わたくし」の多少社会に認められたのは文士としての生涯である」と続けている。「医学者としてはたいしたことはなかったが、文学者としては社会に認められた」といつているのである。好意的な評者はこれを「謙遜」の辞と取るようだが、

筆者は、「謙遜」というなら「文士としても認められたことはない」とでもすべきではないか、と考えるのである。この文章は「謙遜」のことばなどではないのである。

鷗外が「医」に関して言及しているもう一カ所は、「哲学に於ては医者であつた爲に自然科学の統一する所無きに惑ひ、ハルトマンの無意識哲学に仮の足場を求めた」という個所である。ここは難解な点で評論家たちの意見が一致している文章である。なかでも石川淳が「これはどうも意味不明瞭の文句のようである。すくなくとも語を下してははなはだ的確とはいえないように思われる。統一する所無しとは、自然科学に対する形而上学思弁の政治の破産するに至つた事情をいうのであろうか。惑うとは、実験的知識の進歩が基本的概念を動揺させるに至る消臭をいうのであろうか、何とも判じがたい」といつているのは、注目に値する。

結論をいおう。筆者は、「なかじきり」における自らの「医」の側面に関する鷗外のこの発言は、決して「謙遜」などではなく、彼一流の「韜晦」だと思ふのである。

周知のように、医学者としての鷗外は、陸軍医務局長の地位まで昇りつめ、腸チフス予防接種など「衛生上に対する」功績があつたとされている。山田弘論は次で鷗外の功績として「脚気調査会」を設けたことをあげ「この二つが先生が局長御在職中の事業として最も顕著なるものである。」としてい

る。  
が実は後者、脚気問題こそ鷗外のアキレス腱だったのであ

る。明治期における海軍対陸軍・東大医学部の脚気論争においては、陸軍のイデオログであり、強力な実務者として活躍した鷗外は、結果として、日清・日露大戦における陸軍の脚気病による死亡者、三万数千名に対して大きな責任を負っている。鷗外のこの「医学者」としての敗北こそ、とりかえしのつかない不名誉である。世間一般に対していかに事態を糊塗しても、自らはあざむきえない。「学理」はともあれ、臨床医学上の勝敗は一目瞭然である。日露戦争において、鷗外の米飯支持説は敗北した。

「なかじきり」の中の「医」としては社会の問題に上つたことはない」という発言は彼の心境の逆説的表現ではないのか。

「哲学に於ては医者であつた爲に自然科学の統一する所無きに惑ひ、ハルトマンの無意識哲学に仮の足場を求めた」という一節は、鷗外一流の表現において、脚気問題における脚気病源菌説、すなわち特定病因論による「学理」上の信念が、この時期根本的にゆらいでいたことの表明なのではないか、というのが筆者の推論であり、小稿の結論なのである。

(平成八年五月例会)